

Title	村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論 --クミコの「心」と「身体」の分裂--
Author(s)	余, 瑞云
Citation	歴史文化社会論講座紀要 (2018), 15: 71-89
Issue Date	2018-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/230228
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論 ——クミコの「心」と「身体」の分裂——

余 瑞 云

序、『ねじまき鳥クロニクル』研究の現在

村上春樹の長編『ねじまき鳥クロニクル』〔第1部・第2部が刊行された際、注目されたのはこれまでの作品に見られなかった暴力性であった。福田和也「ソフトボールのような死の固まりをメスで切り開くこと―村上春樹『ねじまき鳥クロニクル 第一部、第二部』を読む」(『新潮』一九九四年七月)は、本作に「理不尽な力」が描かれ、村上自身が自らの作品とそれまでの文学世界を叩き壊していると論じている。謎が解明されない点について、沼野充義「村上春樹は世界の「いま」に立ち向う―『ねじまき鳥クロニクル』を読み解く」(『文学界』一九九四年七月)、『村上春樹スタディーズ04』所収、若草書房一九九九年九月)は、謎や秘密が解明されない構造は我々の世界そのものであり、「開かれた」作品にすることで外の世界に向かい合おうとしていると評価した。

第3部が発表された一九九五年以降は、様々な観点から論考が展開されていく。鈴木和成、沼野充義「ねじまき鳥」は何処へ飛ぶか―

村上春樹「ねじまき鳥クロニクル・第3部鳥刺し男編」を読む」(『文学界』一九九五年十月)は、第3部でシナモンの紡ぎ出した物語が作品全体をメタレベルで包みこみ、作品が「いれこ構造」になっていると論じた。日置俊次「村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』試論」(『日本文学』一九九八年六月)、『村上春樹スタディーズ04』所収)は、映画『羊たちの沈黙』が本作における「歴史性」の扱いに影響を与えたとしている。

二〇〇〇年以降は、作品構造の分析や〈歴史〉を語ることにについて論考が深化していく。橋本雅之「「ねじまき鳥クロニクル」論―村上春樹が拓いた神話」(『相愛国文』二〇〇一年三月)は、本作は「井戸」を結節点として、日本神話の系列に属する性格が確かに存在する」と指摘。橋本牧子「村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論―〈歴史〉のナラトロジー」(『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』二〇〇三年三月)は、九〇年代の「歴史修正主義」に対して、本作の「歴史叙述」は〈歴史〉を語ることに「真摯に向き合おうとしたテクストである」と論じている。キャラクター論として、溝渕園子「うつ

る、うつす、うつされる―岡田亨論」(村上春樹 テーマ・装置・キャラクター)所収、至文堂二〇〇八年一月)は、(僕)が「うつる主体」「うつす媒体」「うつされる客体」に変化することで、物語の一元化や特権性が否定されると指摘し、根岸泰子「迷宮へのガイド―加納クレタ」(村上春樹 テーマ・装置・キャラクター)は、クレタは(僕)を歴史のモチーフへ誘い、クミコの意味を気づかせる役割であるとしている。さらに、山崎眞紀子「村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論―火曜日の女から金曜日の女へ」(札幌大学総合論叢)二〇〇九年三月。『村上春樹と女性、北海道』所収、彩流社二〇一三年十月)は、クミコが自立して積極的に問題解決する新たな女性像へと変貌したと論じている。

本作を表面的になぞれば、日常生活での些細なことから夫婦間に齟齬が生じた結果、妻が不倫して家出する内容となっている。結婚生活が破綻した夫婦にありがちな物語に見えるが、ジェイ・ルービンが「これは性的にやや抑圧されている夫の物語となる。さらに抑圧されている妻は、別の男に抱かれて真の性欲に目覚め、夫を棄てる。^②」と指摘した通り、作中から(僕)とクミコの抑圧を読み取ることができ、特にクミコの「性」の抑圧と解放は作品の謎を解く鍵となり、暴力性と深く結びついていると思われる。本稿では、クミコが性的に抑圧していた中味に焦点をあて、他の女性登場人物である電話の女や笠原メイとの関係を通して、クミコの「心」と「身体」の分裂を論じた

一、クミコの二重性

クミコは第2部第1章で姿を消し、同第11章ではじめて家出した理由が明かされる。クミコから(僕)に宛てた手紙には、自分が何かの拍子に性欲を抑えられなくなり、他の男と性的な関係を持つてしまったとある。クミコは「息が詰まって苦しくなるくらい激しく」「彼を求めていた」(第2部第11章)が、その男のことを愛していたわけではなく、「それは愛とかそういうものとはほとんど無縁の行為」(第2部第11章)だったという。三ヶ月近くその男と性的な関係を持つていたクミコは、そのことをずっと隠し、当時は(僕)に対して罪の意識を持たず、苦痛も全く感じなかった。その時の心境についてクミコは次のように語っている。

私の心はあなたとの生活を求めていました。あなたとの家庭が、私の戻っていくべき場所でした。そこが私の属すべき場所でした。でも私のからだはその人との性的な関係を激しく求めていました。半分の私はこちらにあって、半分の私はあちらにありました。いつか破局が訪れるのはわかりきっていましたが。でもその時にはそういう生活がうまく永遠に続くように思えたのです。こっち側の私があるかと心穏やかに暮らしていて、あっち側の私と彼と激しく抱き合っているという二重の生活がです。(第2部第11章)

突然激しい性欲に襲われたクミコは、「心」で〈僕〉との生活を求める自分と、「身体」では他の男を求めるもう一人の自分に引き裂かれてしまう。しかしその後、男に対する欲望が消え失せてから、〈僕〉に対して罪悪感を感じるようになる。〈僕〉との生活を続けられなくなった、と「心」が感じることで、彼女の「身体」は〈僕〉との生活から離れ、姿を消すのである。

以上のように、激しい性欲から別の男と関係を持ったことで、突然クミコの「心」と「身体」が二つに分裂したように見える。しかし、分裂をもたらした根本的な要因は、彼女がはじめから二つの異なる側面を持っていたことにある。後述するが、クミコの中にはある「傾向」が存在し、妊娠したことがクミコの中にあつた「潜在的な何かを刺激して呼び覚ました」（第3部第36章）。そのことを知ったノボルは、「その傾向が表面に出てきた」（第3部第36章、傍点ママ）クミコを自分の側に取り戻そうとし、その過程でクミコは損なわれる。その結果、クミコは激しい性欲が抑えられなくなり、二つの側面が分裂してしまつたと考えられる。

クミコの二重性は、〈僕〉と出会つた頃から現われていた。〈僕〉は最初からクミコと通じ合うところがあるように感じていたが、同時にクミコは「どこことなく、何かについて迷っているような様子が見受けられた」（第2部第6章）ため、他に恋人がいるのではないかと疑わせることもあつた。その迷いのようなものは結婚してからも時々〈僕〉を困惑させ、クミコの中には〈僕〉の入ることができない「彼女だけの領域」（第2部第6章）が存在すると感じさせている。その奇妙な

感覚は、〈僕〉とクミコの性行為において特に顕著であつた。最初クミコの方から〈僕〉のアパートに行つていいかと尋ね、はじめて抱かれても「抵抗感というものがまったく感じられなかった」（第2部第6章）ため、ある意味ではクミコが誘い、抱かれることを求めていると〈僕〉は思っている。それと同時に、最初の性行為には「一種の乖離の感覚」（第2部第6章）があり、〈僕〉は「自分が抱いているこの体は、さっきまで隣に並んで親しく話していた女の体とはべつものなんじゃないか、自分の気づかないうちにどこかでべつの誰かの肉体と入れ代わってしまったんじゃないか」（第2部第6章）という不思議な感覚に襲われる。しかし二度目からは「乖離の感覚」を抱かなくなつたため、これはクミコの最初の性体験だからだろうと〈僕〉は納得する。しかし、一回目に〈僕〉が感じた「乖離の感覚」こそが、クミコの中に隠された別の一面なのであり、それは〈僕〉が知るクミコとは全く異なる存在として〈僕〉に感じ取られていたのである。クミコは〈僕〉との肉体関係を自ら求め、誘いかけてるように見えるが、その一方で、〈僕〉がクミコの中に入ると、彼女の奥の方には異なる一面が存在し、〈僕〉のことを簡単に受け入れようとしないうように感じられる。すなわち、クミコの「心」は〈僕〉を求め、肉体関係を持つてもいいと思つているが、「身体」の奥には〈僕〉を拒絶する別の一面が存在していたと考えられる。

二、クミコの傾向―激しい性欲

クミコの二重性を生じさせている要因は、綿谷家の遺伝的「傾向」だと考えられる。綿谷家の遺伝とクミコの失踪原因に関しては、第3部で牛河と〈僕〉の推測によって示唆されている。牛河の想像に拠れば、クミコは以前から綿谷家の問題を「感じるか知るかしていて」（第3部第31章）、〈僕〉と結婚し家を出て行こうとしていた。〈僕〉の想像に拠れば、「綿谷家の血筋にはある種の傾向が遺伝的に」（第3部第36章）あり、ノボルはクミコの姉に近親相姦的な行為を行い、彼女を自殺させてしまう。姉は死ぬ前クミコに警告を与え、クミコは「自分の血筋の中に何か暗い秘密のようなものがひそんで」（第3部第36章）いることを分かっていた。そのため、クミコは家の中ではいつも緊張し、「得体の知れない潜在的な不安の中にひっそりと暮らしていた」（第3部第36章）。以下、この推測を真実と仮定して論を進める。

クミコの傾向は後に激しい性欲として現われるが、〈僕〉の回想から、クミコは結婚する前から自分の中にあるそうした傾向を漠然と知っていたことが読み取れる。まず、二人が初めてデートをした日、クミコはクラゲを眺めた後、人々は世界の表面しか見ることができず、その下にどんなものがあるのかは知らないと思う。その「もっと暗くて、深いところにある」（第2部第6章）本当の世界は、クミコの中にある暗い傾向を暗示しているのではないだろうか。また、クミコは妊娠した後、「私の中のどこかに、何かちよつとしたものが潜んでいるような気がする」（第2部第7章）と〈僕〉に語る。その「何

かちよつとしたもの」は、クミコの中に潜む暗い傾向のことを指している。このように、結婚前からクミコは自分の中のそうした傾向を自覚していた。

クミコが綿谷家の遺伝を知ったきっかけは、兄ノボルが姉に対して行った近親相姦的な行為である。ノボルのそうした傾向は、第1部でクミコによって語られる。小学校四年くらいの頃、クミコは大学生であったノボルが死んだ姉の服の匂いを嗅ぎながらマスターベーションしている光景を目撃する。当時のクミコはまだ幼く、「性」について何も知らなかったが、ノボルのしているのが「屈折した行為」（第1部第10章）だと理解できた。さらに、〈僕〉の推測が正しければ、姉が死ぬ前にクミコに警告を与えたため、クミコも自分の中にある傾向が潜んでいると知っていた。その正体を正確に掴めてはいなくても、ノボルと同様「性」に関わるものとクミコは理解したのである。異常な性的傾向が自分にも現われることを恐れ、クミコは性欲を無意識に抑圧していたと考えられる³⁾。

クミコの性的抑圧は、最初の性行為の際に〈僕〉が感じた「乖離の感覚」として現われているが、家を出たクミコが〈僕〉に送った手紙からも、それが窺える。

私は結婚前も、結婚してからも、（中略）あなたとのあいだに本物の性的な快感を持つことができませんでした。あなたに抱かれることは素敵だったけれど、でも私がそのときに感じるのはずごく漠然とした、まるで他人ごとのようにさえ思える遠い感覚だけ

でした。(中略) 私がうまく感じることはできなかったのは、純粹に私の側の責任です。私の中につつかえのようなものがあって、それが私の性感をいつも入口で押し止めていたのです。(第2部 第11章、傍点ママ)

最初の性行為で、(僕) が誰か別の肉体を抱いているような「乖離した感覚」を感じたのと同じく、無意識に(僕) を拒絶することによって、クミコも「他人ごと」のような感覚を抱いていた。さらに、クミコの性感が「つつかえのようなもの」によって押し止められていたのは、異常な性的傾向が現れないよう自ら性欲を抑えていたことを意味している。すなわち、得体の知れない傾向に対する恐怖によって、クミコは(僕) を拒絶していたのである。

クミコは(僕) と結婚してからも自分の性欲を抑圧し、性的な快感を得ることができなかった。しかし、「つつかえのようなもの」が取り除かれることで性欲を我慢できなくなり、最後の手紙で告白するうちに、彼女は「たくさんのべつの男」(第3部第40章) と性的な関係を持つてしまう。(僕) と牛河の推測に拠れば、まず、クミコの妊娠によってその遺伝的傾向が呼び覚まされた。ノボルはそのことを知り、クミコを自分の側に取り戻そうとする過程で、彼女を「これまで支えてきた柱みたいなのがどこかでぼきんと折れてしまった」(第3部第31章)。クミコを支えてきた柱は、自分を正常に保つために、自分を性的に抑圧していた「つつかえのようなもの」で、それがノボルに損なわれてしまったため、クミコは激しい性欲を感じるようになったと

考えられる。クミコも何故激しい性欲を感じるようになったのか、自分でも理解できないと言うが、「それは兄の影響力のせいだったかもしれない」、(僕) が私の中にある引き出しのようなものを勝手にあけて、(中略) 私をほかの男と際限なく交わらせたのではないか」(第3部第40章) と最後の手紙で書いている。このように、ノボルはクミコを取り戻そうとする過程で、彼女の性的な抑圧を解き、彼女の激しい性欲を引き出したのだ。

さらに、クミコは自分の遺伝的傾向が子供に遺伝することにも不安を感じていた。そのことを(僕) が理解したのは、クミコが姿を消してから一年以上経った時で、「妊娠したときに「クミコが——引用者注」パニックにおちいったのは、それが自分の子供の中に現われてくることが不安だったからだ」(第3部第36章) と(僕) は考えている。妊娠したクミコが墮胎した時、墮胎という行為に強くとらわれた(僕) は、本当に問題となっていたのが遺伝に関係したことだと気づかなかったのである。

当時(僕) は、二人に「子供を産んで育てるほどの経済的余裕はなかった」ため、「ずっと注意深く避妊」(第2部第7章) していたが、クミコは妊娠してしまう。二人で、子供を作ることは「非現実的な道」であると話し合ったものの、それでも墮胎してほしくないと言う(僕) に対し、クミコは「今ここで子供を作ったら、私の仕事も終わってしまう」、「生活の余裕なんてものはまったくなくなってしまう」(第2部第7章) などと経済的な理由を挙げて反論している。その時の二人、少なくとも(僕) にとって、子供を作らないことの最大の理由は経済

的な問題であり、それが解決できたら子供を作れると考えていた。しかしクミコには「遺伝」が問題だったのである。そのことをクミコは〈僕〉に「打ち明けてしまふべきだった」（第3部第40章）と最後の手紙で回想するが、妊娠し、墮胎を決意した当時はまだ「確信が持てない」（第2部第17章）ため、クミコは〈僕〉に綿谷家の遺伝を語るこゝろができなかったのである。

なお、クミコが綿谷家の遺伝に怯え、「子供を作ることに恐怖を感じていた」（第3部第36章）とされた設定は、村上春樹自身の経験によると考えられる。イアン・ブルマによるインタビューの中で村上は、大学在学中徴兵されて陸軍に入り、中国へ渡った父親について次のように語っている。

村上は子供の頃に一度、父親がドキッとするような中国での経験を語ってくれたのを覚えている。その話がどういふものだったかは記憶にない。目撃談だったかも知れない。あるいは、自ら手を下したこともかもしれない。（中略）

父親に中国のことをもつと聞かないのか、と私は尋ねた。「聞きたくなかった」と彼は言った。「父にとつても心の傷であるに違いない。だから僕にとつても心の傷なのだ。父とはうまくいっていない。子供を作らないのはそのせいかもしれない」。

私は黙っていた。彼はなおも続けた。「僕の血の中には彼の経験が入り込んでいると思う。そういう遺伝があり得ると僕は信じている」。(4)

村上は父親について滅多に話さず、先に引用した内容を語った後、「翌日電話をかけてきて、あのことは書きたてなくてよかった」という。話の真偽を確認することは難しいが、本当であれば、村上が子供を作らない理由は、父親の戦争体験が遺伝したと村上自身信じているからと分かる。こうした考え方が、クミコが子供を作ることを拒否する設定に反映されていると思われる。

三、ノボルの傾向―近親相姦

ノボルがクミコの性欲を引き出した理由は、彼が普通の方法で女性と肉体関係を結ぶことができず、同じ綿谷家の遺伝的な傾向を持った女性としか性的関係を持てないからだと考えられる。ノボルがクミコの姉に対して近親相姦的な欲望を抱いていたことは、山崎眞紀子によつて指摘されている⁽⁵⁾。また、離婚した妻とのあいだに「正常な性生活がまったくなかった」（第3部第31章）ことや、クレタを娼婦として呼んだ時、彼女の中に自分の性器ではない、別の「何か」⁽⁶⁾を入れたことを考えると、ノボルは性的に不能であり、近親相姦的な行為を通してしか「女性と性的にコミットできない」（第3部第36章）人物と考えられる。

クミコの姉が自殺した後、ノボルがクミコに対して同じように近親相姦的な行為を行ったことは作中に明記されていない。しかし、クミコがノボルの近親相姦的な傾向を恐れていたことは、第1部の改稿箇所⁽⁷⁾に示されている。すなわち、当初、クミコが自分の学生時代の服を

保存しているときれた設定は、彼女が姉の身代わりのようになることを避けるため、手元に服を留めたと推測されるのである。第1部で《僕》は洋服ダンスを全部開けて水玉のネクタイを探すのだが、第1部の初出誌と単行本には、後に『村上春樹全作品1990〜2000④』で削除される次のような記述が見られる。

洋服は、僕のものも彼女のものも、いつものように綺麗に整理されていた。シャツは皺ひとつなく引き出しにしまわれ、セーターを詰めた箱には防虫剤がたっぷりとききつめられていた。蓋をあけただけで目が痛くなるくらいだった。ある箱には、彼女の学生時代の服が入っていた。花柄のミニのワンピースやら、高校の紺色の制服なんか、古いアルバムみたいな感じでそこに収められていた。どうしてそんなものがわざわざ保存してあるのか、僕には見当がつかなかった。捨てる機会のないままにずっと今まで持ち運んできたのかもしれない。あるいはいつかバン格拉デシユにでも送ろうと思っていたのかもしれない。あるいはゆくゆく文化資料にするつもりなのかもしれない。しかしとにかく、僕の水玉のネクタイはどこにもなかった。(7)

クミコは、《僕》が初めて会った時からその着こなしに感心していたように、自分の洋服を大事に扱う人物として造形されていたため、そうしたこだわりから学生時代の服を保存していたとも考えられる。しかし、ノボルが姉の洋服を使って「屈折した行為」を行っていた記

憶こそ本当の理由ではないだろうか。クミコはおそらく学生時代の服を捨てようとも考えていたが、洋服を捨てただけではノボルの手に渡らないという確信が持てない。死んだ姉の服が結局処分されず実家に置かれた結果、ノボルに使用されたのを知ったクミコは、結婚後の新しい家に移して確実に保管した方がよいと考えたのだろう。しかし《僕》は、ティッシュペーパーの色など、クミコの好き嫌いを知らなかったように、結婚後六年間保存された服の存在に気づかず、従ってノボルに対するクミコの不安にも無知であったことになる。

このように、クミコは自分が死んだ姉の代わりになる可能性があったため、ノボルに対して恐怖を抱いていた。クミコの最後の手紙では、ノボルは回復できない程度まで姉を汚して自殺させ、同じことを自分に対して行つたと語っている。また、《僕》と牛河の会話でも、ノボルがクミコに対して近親相姦的なことを行つたことが示唆されている。

「ということつまり、あなたは綿谷ノボルとクミコとのあいだに性的な関係みたいなものがあると言いたいわけですか?」

「いや、何もそんなことは言ってません」(中略)「そういうことを匂わせているわけじゃありませんよ、先生とクミコさんとのあいだに何があったのか、(中略)そこには何かしらゆがんだものが存在しているように、わたしには思えるんです。」(第3部第31章)

牛河はノボルとクミコの間の性的な関係を否定するが、二人の間には「ゆがんだものが存在」という。クミコは手紙で、ノボルが行ったことは「正確に言えば肉体的に汚したわけではありません」（第3部第40章）と語っているが、ノボルが性的に不能であることを踏まえると、実際に肉體關係を持たなかったとしても、二人の間にはある種の性的な、近親相姦的な關係が存在していた可能性を否定できない。クミコが近親相姦を恐れていたことは、もう一つの改稿箇所でも示唆されている。初出の際、第1部で〈僕〉が仕事を辞めてから読書の喜びに浸っている場面である。

何はともあれ、自分の純粹な楽しみのために本を読むのはひさしぶりのことだった。この何年間のあいだに読んだ本といえば、法律關係の本か、あるいは通勤の電車で簡単に読めるような間に合わせの本ばかりだった。誰が決めたわけでもないのだが、法律事務所で働いている人間がガルシア・マルケスや、ギンター・グラスを読むことは、不品行とまでは言わないまでも、あまり好ましくない行為であると思なされていた。そのような本が僕の鞆の中や、あるいは机の引き出しの中にあるのが発見されたとしたら、人々はきつと皮膚病にかかった犬を見ろみたい僕のことを見ただろうと思う。そしてきつとこう言っただろう、「ふむふむ、君は小説を読むのが好きなんだな。僕も小説は好きだよ。若いころはよく読んだなあ」と。彼らにとつては、小説というのは若い時に読むものなのだ。ちょうど春に苺を摘み、秋に葡萄を収穫する

ように。(8)

初出誌のみに現われる「ガルシア・マルケス」から、彼の代表作『百年の孤独』⁹⁾を思い浮かべることは容易だろう。『百年の孤独』ではまず、近い血縁での結婚が続いたことで「豚のしっぽ」が生えた子供が生まれる。その先例により近親同士の結婚が禁じられるが、結末では近親者同士の性行為によって再び「豚のしっぽ」の生えた「怪物」が生まれてしまう。このように、『百年の孤独』では「近親相姦」が重要なモチーフとなっているが、これは『ねじまき鳥クロニクル』でも同じである。

そもそも、『ねじまき鳥クロニクル』三部作は本来第1部と第2部で完結する予定であり、第3部は後に書き足されたものであった。当初第2部で謎が解明され完結することになっていたから、第1部初出ではガルシア・マルケスに言及し、『百年の孤独』における「近親相姦」の問題が、ノボルの近親相姦的傾向と、クミコ失踪の謎を解く鍵となっていることを暗示したと考えられる。ところが、後に第3部が執筆されることになり、ノボルの正体とクミコ失踪の原因を明確化できたため、第3部ではじめて謎が明かされるように、第1部の前掲箇所は削除されたと考えられる。

以上の通り、綿谷家の遺伝はクミコとノボルの間で異なる傾向として現れているとはいえ、自分の結婚したパートナーと性的にうまく「コミット」できない点は共通している。ノボルが妻に「コミット」できず離婚するように、クミコも二ヶ月近くいろいろと理由をつけて〈僕〉

と性的関係を持つことを避けつづけていた。クミコが性行為を拒否することは、電話の女が「あなたはこの前いつ奥さんとセックスしたか覚えている?」、「それは何といつてもあなたと奥さんとのあいだの問題だものね。」(第一部第11章)と指摘した通り、二人の関係がこじれたことを示す。そのため、ノボルが離婚したように、クミコも手紙で「離婚の手続きを取るようになる」(第二部第11章)と〈僕〉に伝えるのである。

四、クミコの分裂

綿谷家の遺伝によって、前述のように「心」と「身体」が分離したクミコは、〈僕〉のところに戻ることを拒否し、接触を絶とうと決意していたように見える。しかし、クミコの二つの側面は二人の女性として登場し、〈僕〉にクミコ救出のヒントを与えていた。

まず、一人目の分身は第一部第1章から登場する電話の女である。結末からも分かる通り、その正体はクミコで、何度も〈僕〉を性的に誘い、性行為を拒むクミコの代わりに「あなたの求めるものを何でもあげるわよ」(第一部第11章)と積極的な態度を示す。また、〈僕〉は夢の中でクレタと交わり、クレタは二度目では途中から電話の女と入れ代わる。その時に電話の女は「なまめかしく腰を動かし」(第二部第2章)、〈僕〉の性器を自ら受け入れている。これらの描写から、電話の女は成熟した身体と性欲を持った女性であることが分かる。彼女の電話の内容はまるでボルノ・テープのようで、〈僕〉は彼女が「あ

の奇妙な暗い部屋から僕を求めているのだ」、「そこには今も、彼女の激しい性欲がある」(第二部第15章)と後に確信を持つようになる。電話の女が存在する居場所、〈僕〉がいる現実世界ではなく、壁抜けを通して辿り着く「あちら側」の世界であり、そこから彼女は〈僕〉の身体を求めてくる。このように、電話の女はクミコの心身が分裂した結果、「身体」だけが〈僕〉を求め、「あちら側」に移ってしまったクミコであり、〈僕〉に対して性的な欲望を感じる存在と考えられる。「こちら側」のクミコが心では〈僕〉を求めながらも、性的に拒絶しているのと対照的である。すなわち、「こちら側」にはクミコの「心」が、「あちら側」にはクミコの「身体」が、それぞれ分裂して存在しているのである。

クミコは分身である電話の女を通して〈僕〉にメッセージを送っていたが、〈僕〉はその正体に気付かず、電話を黙殺してしまう。ところが、クミコはもう一人の分身的存在の力を借りて、救出のヒントを与えていた。その人物が笠原メイである。従来、クレタがクミコとは、生まれた月や体型、服や靴のサイズまで驚くほど似ていること、いずれも姉と兄がいる三人兄弟であること、さらに両者ともノボルに汚されたことから、分身であるとされてきた。一方笠原メイは、クレタと比較して年齢や体型などクミコと似ているところがあまり見られない。しかし、両者の分身性は以下から明瞭であろう。

まず、クレタ同様、クミコと笠原メイも五月生まれである。笠原メイはその名の通り五月に生まれ、「六月に生まれてメイなんて名前をつけられたらややっこしくて仕方ないじゃない」(第一部第5章)と

言う。なお、本作以前の短編『双子と沈んだ大陸』¹⁰にも笠原メイという人物が登場するが、年齢や職業などの特徴は異なり、「八月二十一日生まれ¹¹」である。「ねじまき鳥クロニクル」で五月生まれとしたのは、クミコとの繋がりを深くさせるためであろう。

また、笠原メイが〈僕〉宛てに書いた七通目の手紙には「アヒルのヒトたち」という一風変わった表現があり、彼女もその「表現はなんだかヘンだけど、私はついつい習慣的にそう言ってしまうのね」（第3部第38章）と認めている。一方、第2部では、長い間クラゲを眺め続けたクミコが「世の中にはこんなに鮮やかなピンクのクラゲがいるのね。それなんて綺麗に泳ぐんでしよう。このヒトたちはこんな風に一生かけて世界中の海をふらふらとさすらっているのね。」（第2部第6章）と語っている。いずれも、動物を「ヒト」とカタカナで呼ぶことが共通するが、この変わった表現は他の登場人物には見られず、笠原メイとクミコの繋がりを示しているよう。

さらに、笠原メイは六通目の手紙で次のように言う。「最近ときどき自分がクミコさんになってしまったみたいな気持ちがある」、「本当はねじまき鳥さんの奥さん」だが、「いろんな事情があって私はとりあえず笠原メイという偽名を使って仮面をかぶって、クミコさんじゃないふりをしている」（第3部第30章）と。これは笠原メイがクミコの分身として〈僕〉に接していたことを暗示しているのではないだろうか。

電話の女が成熟した身体を持ち、〈僕〉との肉体関係を求めているのとは対照的に、笠原メイは「乳房はたしかにまだ小さく、膨らみも

薄かった」（第2部第16章）。さらに、彼女は二通目の手紙で、「もしここで突然ねじまき鳥さんが私を押しおしてむりやりレイプしようとしたら、私はどうすればいいんだろう」（第3部第7章）と考えていたと言うように、〈僕〉との性的な関係を受け入れようとしな。恋人と思われる男の子にも、自分の身体を「ぜったいさわらせてなんかやるものか」（第3部第16章）と思っていた。一方、心理的には、林間学校を辞めてから家にこもっていた間、一日に百回くらい「ねじまき鳥さんに会いたい」、「ねじまき鳥さんと話をしたい」と思い、「私にとってここはもう「ねじまき鳥さんの世界」でしかない」、「ここにいる私は「ねじまき鳥さんの世界」にふくまれる私でしかない」（第3部第7章、傍点ママ）と述べるように、彼女は〈僕〉を必要としていた。すなわち、笠原メイの「身体」は〈僕〉を拒んでいるが、「心」は〈僕〉を求めている。これは、〈僕〉のことを愛しているが、〈僕〉との性行為を無意識に拒否してしまうクミコの一面が笠原メイとして存在していると言えよう。クミコが家を出ていった後、笠原メイは〈僕〉が現実世界で会って話をするのできる、「こちら側」のクミコの代替的存在となっていたのだ。

このように、心身をめぐって、電話の女と笠原メイは対照的な存在であった。さらに、フロイト¹²が提唱した「エロス」と「タナトス」の対立の面でも二人は対照的である。フロイトは人間の欲動理論¹³において、人間には「二種類の本質的に異なる欲動が存在すること」を想定し、一つは「最広義の性欲動」（エロス）、もう一つは「破壊を目標とする攻撃欲動」（タナトス）とした上で、タナトスは自分の内

部に向けられるだけでなく、外部の対象にも働きかけるとしている。

これに拠れば、電話の女は性的欲動が強く、暴力や破壊的な欲動は見られない一方、笠原メイは性的欲動に目覚めていないものの、「人が死ぬのつて、素敵よね」「死のかたまり、みたいなもの」を「メスで切り開いてみたい」（第1部第1章、傍点ママ）と語るように、死の欲動が強く、〈僕〉を井戸の底に閉じ込めて「死」に近づかせようさえしている。バイクに乗っている時に事故を起こして男の子を死なせてしまったことから、彼女はタナトスの欲動が強く、攻撃欲動が外部の対象に向けて作用していることがわかる。すなわち、笠原メイがタナトスを、電話の女がエロスを表していると解される。

このように、電話の女と笠原メイは成熟した女と少女、性への欲望と拒絶、エロスとタナトスといった面で対照的に描かれている。にもかかわらず、二人が「声」を通して〈僕〉に接触する時、「人の声色の記憶にはかなりの自信を持っている」（第1部第1章）と強調される〈僕〉が二人の声を混同し、或いは把握できなくなる場合がある。例えば、はじめて電話の女からの電話を受けた後、〈僕〉は笠原メイに出会う。笠原メイがはじめて笑うのを見ると、〈僕〉は電話の女の「撫でて」（第1部第1章）という声が聞こえたような気がする。ここでは二人の声が重ねられており、二人がそれぞれクミコの異なる一面を表していることを示していると考えられるのである。

五、分身による働きかけ

クミコの「身体」と「心」が分裂し、それぞれ電話の女と笠原メイの姿を借りて〈僕〉に接触したことを確認した。とすれば、現実世界でクミコが〈僕〉に語り得なかったことが二人の口を通じて暗示されたのではないか、ということが考えられる。二人に共通するのは、〈僕〉に「想像」させ、真相に近づかせようとしているということである。

まず、電話の女は作品冒頭で〈僕〉に電話をかけ、二回目の電話で〈僕〉のことを十分に知っている証拠を示す。その上で彼女は、「今度はあなたが私のことを想像してみて」、「声から想像するのよ。私がどんな女かってね。」（第1部第1章）と言う。〈僕〉が電話の女の正体に気づくのは第2部であるため、〈僕〉は「わからない」と繰り返し、「想像」することを放棄している。電話の女は自身について〈僕〉に考えさせ、クミコであることに気づかせようとしたのであり、もしこの時点で〈僕〉が少しでも電話の女の正体を「想像」していたら、もっと早い段階で真相に辿り着けていたかもしれない。その後、電話の女は再び電話をかけるが、依然として〈僕〉は彼女が誰なのかわからない。電話の女は「あなたは私を知っている」、「あなたの記憶にはきつと何か死角のようなものがあるのよ」、「あなたにはそのことがまだわかってないのよ」（第1部第11章）と言う。結局、第2部結束で、区営プールで幻影のようなものを見た〈僕〉は、電話の女が言った記憶の死角を思い返し、ようやく彼女とクミコの繋がりを理解する。しかし、第2部第15章の時点で〈僕〉は彼女の正体に気づかず、女からの

電話を拒否してクレタとクレタ島に行くことを決める。以後女から電話がかかってくることはなく、〈僕〉とクミコの繋がりも絶たれたように見えるが、実はクミコはもう一人の分身を通して、〈僕〉と接触をしていた。それが笠原メイである。

笠原メイは〈僕〉に二つのことを伝えようとしていた。一つは「遺伝」の問題である。第1部ではじめて〈僕〉と会った笠原メイは、指が六本ある親類の話をする。

「ねえ、もしあなたが好きになった女の子に指が六本あることがわかったら、あなたはどこうする？」と娘は話のつづきを始めた。

(中略)

「たぶん気にしないと思うな」

「子供に遺伝する可能性があるとしても？」

少しそれについて考えてみた。

「気にしないと思うね。指が一本多くなったって、べつに支障はない」

「乳房が四つあったとしたら？」

それについてもしばらく考えてみた。

「わからない」と僕は言った。(第1部第1章)

笠原メイがここで問題にしているのは、好きになった対象の身体的特徴だけでなく、子供に遺伝する可能性である。六本の指は気にしない〈僕〉は考えているが、四つの乳房に関しては「わからない」と答えて話題を変える。それに対して、笠原メイはもう一度〈僕〉に同

じ質問をする。

「でもさ、さっきの話だけど、あなた指が六本ある女の子となら結婚してもいいけど、乳房が四つあるのは嫌だって言ったわね」

「嫌だとは言っていない。わからないって言ったんだ」

「どうしてわからないの？」

「うまく想像できないから」(第1部第1章)

笠原メイに尋ねられ、〈僕〉はもう一度四つの乳房のことを考えてみるが、うまく想像できない。電話の女に彼女のことを想像してみよう誘われた時、「わからない」と一貫して答えていたのと同じように、ここでも〈僕〉は「うまく想像できない」、「わからない」と答えている。第3部になると、「綿谷家の血筋にはある種の傾向が遺伝的に」(第3部第36章)あり、クミコはその傾向に怯えていたため、子供を作ることに恐怖を感じていたと明かされる。笠原メイは、この秘密を〈僕〉に打ち明けられなかったクミコに代わって、「遺伝」について考えさせようとしたのではないだろうか。笠原メイが言う「六本の指」と「四つの乳房」は、両方とも正常な身体より数が多い状態を示し、『百年の孤独』で描かれたような、「豚のしつぽ」という余分な部位の生じた「怪物」の誕生を示唆している。綿谷家の遺伝を受け継いだクミコの過剰な性欲も暗示しているかもしれない。

さらに、笠原メイはクミコの代わりにもう一つ、自分で抑えることのできない熱源のようなものを伝えている。井戸に潜った〈僕〉

を中に閉じ込めた笠原メイは、自分の中にあつた「白いぐしゃぐしゃとした脂肪のかたまりみたいなもの」(第2部第16章)を抑えきれなくなつたため、〈僕〉を閉じ込めてしまつたと説明する。

「私は思うんだけど、人間というのはきつとみんなそれぞれ違うものを自分の存在の中心に持つて生まれてくるのね。そしてそのひとつひとつ違うものが熱源みたいになって、ひとりひとりの人間を中から動かしているの。もちろん私にもそれはあるんだけれど、ときどきそれが自分の手に負えなくなつてしまふんだ。私はそれが私の中で勝手に膨らんだり縮んだりして私を揺さぶるときを感じをなんとか人に伝えたいのよ。でもそれはわかつてもらえない。(第2部第16章)

笠原メイが「熱源」によつて自分をコントロールできなくなることを説明した後、〈僕〉はそのような状態を実際に体験する。札幌のスナック・バーの歌手を殴ることを止められなくなった際、〈僕〉は「自分がふたつに分裂してしまつてゐることがわかつた。こつちの僕にはもうあつちの僕を止めることはできなくなつてしまつてゐる」(第2部第17章、傍点ママ)と自覚する。この場面で〈僕〉は、「クミコのことを考え」ながら「からだの中に」わき起こつた怒りが解き放たれることで、自分が二つに分裂し暴力行為を止められなくなったのである。一方クミコの場合、激しい性欲が解き放たれることで心身が分裂し、最後の手紙で告白したように「たくさんのべつちの男」(第3

部第40章)と性的関係を持つてしまふ。この、自分が分裂した感覚について、笠原メイが「なんとか人に伝えたいのよ。でもそれはわかつてもらえない」と言うように、クミコも事前に感じていたその感じを〈僕〉に伝えられなかつた。そこで、笠原メイがクミコにかかつて〈僕〉にこの感覚を説明し、〈僕〉自身もその後クミコの心身分裂に近い体験をすることで、自分をコントロールできない状態を理解したのではないだろうか。

以上のように、自分の「熱源」を抑えきれなくなつたクミコは「心」と「身体」が分裂し、電話の女となつて「あちら側」の世界から何度も〈僕〉に呼びかけた。また、「こちら側」の現実世界でも笠原メイの口を借りて、自分が抱えていた秘密の正体、すなわち「遺伝」に対する恐れと、「熱源」から生じる心身の分裂を理解させようとした。クミコは家出した後の手紙で「私の行方を探したりもしないでください」(第2部第11章)、コンピューターでの通信の際に「あなたのところに帰りたくない」(第3部第23章)と主張するが、他の手段よつて必死に〈僕〉へメッセージを発信し続けていたのである。

六、「心」と「身体」の合体

電話の女がクミコであると理解した〈僕〉は、壁抜けして208号室にいる電話の女に会い、現実世界に連れ帰ると伝える。クミコを取り戻すために、〈僕〉は謎を解き始める。「これはあくまでも僕の想像に過ぎないのだけれど」(第3部第36章)と〈僕〉は電話の女に語り、

ノボルがクミコの姉とクミコを損なってしまったことを「想像」する。すべてが〈僕〉の「想像」で、「僕の想像に何の根拠もない」（第3部第36章）ことを〈僕〉自身も認めているが、クミコの秘密を「想像」することは彼女が〈僕〉に求めていたことであつた。〈僕〉の「想像」に対し、電話の女が「それがあなたの想像なのね？」（第3部第36章、傍点ママ）と言つて野球バットを手渡すのは、〈僕〉の推測を肯定し、自分がクミコであると認めたということだろう。

バットでノボルと思われる人物を殴り倒し、井戸に戻ってきた〈僕〉は溺れそうになる。その時、〈僕〉は笠原メイのことを考え、井戸の口に向かつて彼女の名を大声で怒鳴る。それとほぼ同時に、笠原メイは遠く離れた場所で〈僕〉の声をはつきり耳もとで聞く。目が覚めた笠原メイは、自分も理解できない不思議な行動に出る。大きな月の光が部屋に射し込む中、笠原メイは裸になって、「自分のからだのいろんな部分をその月の光の中に順番にさらして」（第3部第38章）みただのだ。どうして裸になつたのか、笠原メイ自身もよくわからないと言うが、その夜の満月に影響されたからだと考えられる。

満月は、クミコと関わり深いものとして描かれていた。クミコの生理は「月の満ち欠けと見事に呼応し」（第1部第2章）、〈僕〉は月が満月に近づいていることを知ると、クミコの生理が近いことを思ひ出す。満月と同時にクミコの生理がやってきて、彼女は精神的に不安定になっていた。また、満月はクミコの生理と精神状態だけでなく、性欲にも影響を及ぼしていたと思われる。第1部第2章でクミコがはじめて連絡なしに遅く帰宅した場面は、当時の〈僕〉が仕事を辞めて一

週間経つたばかりとされるが、第1部第3章で一九八四年六月が「仕事を辞めてから二ヶ月ほど」と書かれていることから、〈僕〉が仕事を辞めたのは一九八四年四月頃と考えられる。一方、第2部第11章、一九八四年七月に〈僕〉に送られた手紙に拠れば、クミコは「この三月近く、その男と性的な関係を持つていました」とあり、一九八四年四～五月頃から他の男と肉体的な関係を持つていたと思われる。とすれば、クミコが夜遅く帰宅した一九八四年四月のある日は、彼女がはじめて別の男と性的な関係を持った日と推測できる。その日、遅く帰ってきたクミコは機嫌が悪く、〈僕〉はカレンダーを見て、満月に近いことを確認していた。つまり、その日生理が近くなつたクミコは、彼女の中にある遺伝的な傾向が刺激され、激しい性欲を感じたと考えられる。

クミコと満月の関連性を踏まえた上で、もう一度先の笠原メイの奇妙な行動を考えてみたい。「性」に対して関心を持たず、バイクの事故で死んだ男の子に裸を見せることもしなかつた笠原メイが、この場面では「月の光はほんとうに信じられないくらいきれいだったから」（第3部第38章）、裸になつたという。満月がクミコの性欲を導き出したように、笠原メイも満月の光が持つ不思議な力によって、性的な欲望が引き出されたのではないだろうか。

この場面で、少女性・処女性を持つた笠原メイの身の上にある変化が生じている。月の光にさらした自分の身体を見た時、彼女は次のように感じる。

月の光は私のからだをふしぎな色に染めて、私のからだの影が床のうえに、くつきりと黒く壁のところまで長くのびていました。それは私のからだの影みたいには見えませんでした。それは誰かべつの女の人のからだに見えました。べつの、もつと成熟した女のひとのからだみたいにね。そのからだは私みたくに処女じゃなくて、私みたくにへんにごつごつしてなくて、もつと丸みをおびているし、おっぱいだって乳首だってずっと大きい。(第3部第38章)

これまで少女的な体型とされていた笠原メイが、ここでは影が別の「もつと成熟した女」に変貌する。この「成熟した女」は、笠原メイと対照的に描かれてきた電話の女を思い出させる。性的な欲望を持った電話の女が笠原メイの身体に宿り、彼女の影として出現したことが暗示されているのではないだろうか。そう考えれば、性を拒否していた笠原メイが性的な欲望を感じ、自分でも理由が分からないまま突然裸になったのも納得しやすい。すなわち、笠原メイと電話の女が同化したことは、性を拒む一面と、性的な欲望を持つ一面とに分裂していたクミコが一つに統合されたことを暗示しているように。

二つに分裂したクミコが統合されたきっかけは、(僕)がノボルを倒したことだと考えられる。二人の闘争は208号室で行われるが、この部屋は(僕)が考えるように、「クミコ自身が抱えていた暗闇の領域だった」(第2部第18章)。この208号室に(僕)は何度も辿り着いているが、いつも誰かが部屋の外からドアを強くノックし、部屋

のロックを外して入って来ようとする。(僕)の意識の中で何度も繰り返されるこの場面は、フロイトの夢判断における象徴作用¹⁵⁾を用いれば、クミコとノボルの性的な関係の暗示と捉えることができる。フロイトに拠れば、夢の中の「部屋」は女性器、「扉」や「門」は性器の開口部の象徴となる。208号室では、性的な欲望を持った電話の女が(僕)を待っているが、これはクミコの女性器の象徴である部屋に(僕)を受け入れること、すなわち(僕)を性的に求めていることを意味する。(僕)はクレタの導きによって、一度だけ208号室の中で電話の女と性交をしたことがある。はじめはクレタと交わっていたが、いつの間にか彼女は電話の女に入れ代わる。その出来事について、(僕)は「それはもう加納クレタの性器ではなくて、その女の性器だった。僕にはその温度や肌合いの違いがわかった。まるで違う部屋に入ったときのように。」(第2部第18章)と回想している。作品本文に照らしても「部屋」は女性器の象徴と捉えることができる。

208号室で、ノボルと思われる人物がドアのロックを外して侵入しようとする行動は、クミコの性器開口部を無理やりこじあけて入り込もうとすること、すなわち強引な近親相姦と解される。(僕)がノボルを倒すことは、クミコをノボルの呪縛、すなわち近親相姦的な脅威から解放することだったのである。

このように、(僕)は「あちら側」の世界でノボルを倒し、クミコの近親相姦への恐れは解消された。現実世界でもクミコは実際にノボルを殺し、彼の性的な影響力を永遠に消滅させた。クミコの異常な性欲がノボルによって引き出される可能性はなくなったが、しかし、彼

女の中にある綿谷家の遺伝はまだ残っているはずである。そのため、クミコは何かのきっかけで再び異常な性欲を感じるようになることを恐れ、自らを性的に抑圧し続けるのではないだろうか。クミコの性的な欲望を持つ一面は電話の女が、現実世界にいるクミコ自身ではなく、笠原メイに統合されたことも、クミコが〈僕〉に対する性欲を取り戻せなかったことを暗示しているのだろう。

さらに、笠原メイと電話の女が統合されたことにより、笠原メイがクミコの代わりとなることが予想される。実際、結末で〈僕〉が工場で働く笠原メイに会いに行き、林の中を二人で歩いている場面に次のような描写がある。

笠原メイは右手の手袋を取り、僕のコートのポケットにつっこんだ。僕はクミコの仕草を思いだした。彼女は冬に一緒に歩いているときによくそうしたものだ。寒い日にはひとつのポケットを共有するのだ。僕はポケットの中で笠原メイの手を握った。彼女の手は小さく、奥まった魂のように温かかった。

「ねえねじまき鳥さん、みんなきつと私たちのことを恋人たちだと思おうでしょうね」

「そうかもしれない」と僕は言った。(第3部第41章)

ここで想起された「クミコの仕草」とは、第2部でクミコとデートした〈僕〉が、彼女に恋人がいるのではないかと尋ねた時の仕草を指す。

クミコは立ち止まって手袋を取り、それをコートのポケットに入れた。そして手袋をはめていない僕の手を握った。彼女の手は温かく柔らかかった。僕がその手を軽くにぎりかえすと、彼女の吐く息がもつと小さく、もつと白くなったように思えた。(第2部第6章)

ここから分かるように、笠原メイの仕草はクミコと同じであり、〈僕〉も同じように手を握りかえしている。第2部では、その後、クミコは〈僕〉とはじめて性行為を行い、恋人であると確認した。第3部で笠原メイが「みんなきつと私たちのことを恋人たちだと思おうでしょうね」と言ったのは、彼女がクミコのかわりとして〈僕〉の恋人になることを暗示していると考えられる。

その後、笠原メイが〈僕〉を駅まで見送った時、空には「上弦の月」が浮かび、電車が動き出した後もしばらく〈僕〉の頭上にあった。〈僕〉はそれを眺め、月が見えなくなると町の明かりを眺め、「一人でバスに乗って山の中の工場に戻っていく、青い毛糸の帽子をかぶった笠原メイの姿を思い浮かべ」(第3部第41章)ている。もともと〈僕〉は満月を見るとクミコと彼女の生理を思い出す人物として描かれていたが、この場面では、上弦の月を眺めた後、笠原メイを思い浮かべるようになっていく。このような心境変化も、〈僕〉の「心」がクミコから笠原メイに移っていったことを示しているのではないだろうか。

以上のように、電話の女が笠原メイに統合されたことにより、笠原メイはクミコの身代わりとなり、〈僕〉の恋人的存在になっていく

ことが予想される。とすれば、〈僕〉の希求とはうらはらに、現実的にはクミコが〈僕〉のところに帰還する可能性は少ないのではないだろうか。

終わりに

村上春樹作品にはしばしば、心身が分裂して損なわれる人物が登場する。もともと顕著な例が『ノルウェイの森』（講談社、一九八七年九月）の直子で、彼女は好きだった幼馴染の恋人と性的関係を結ぶことができなかったが、主人公ワタナベ・トオルとは一回性交でき、後に「心」と「身体」の矛盾から自殺してしまふ。

直子とクミコに共通するのは、性行為の際に自分の身体の中に異物が存在することである。『ノルウェイの森』のワタナベ・トオルは、直子との性行為の時に「彼女の体を抱いていると、僕はその中に何かしらうまく馴染めないで残っているような異物のごつごつとした感触を感じる」ことができた。⁽¹⁶⁾と感ず、『ねじまき鳥クロニクル』の〈僕〉も、クミコとの最初の性行為の時に「一種の乖離の感覚」を抱いている。二作品における「ごつごつとした感触」や「乖離した感覚」は、直子とクミコが二人とも自分の性欲を蓋で抑えていたことを表していると考えられる。

このように、クミコと直子は自らを性的に抑圧し、心身が分裂した点で共通し、西村龍一も前掲論文で、「心と性の分裂に見まわれることでクミコが直子の継承者である」と指摘している。しかし、『ねじ

まき鳥クロニクル』は従来の恋人関係ではなく、夫婦関係を描いているため、「性」は「生殖」や「遺伝」の問題へと広がりを見せている。クミコは自身の遺伝を恐れ、自らを性的に抑圧していたが、近親相姦的な傾向を持つノボルによって性欲が解き放たれ、「心」と「身体」が分裂してしまふ。分裂したクミコは姿を消すが、彼女の「身体」と「心」は電話の女と笠原メイの姿を借りて〈僕〉にヒントを与え続けていた。二人の分身の働きかけにより、〈僕〉はクミコの妊娠に対する恐れや綿谷家の遺伝を理解し、ノボルを撃退することでクミコの心身分裂を解消させ、近親相姦的な脅威から救い出すことができた。

クミコが〈僕〉のところに戻ってくるかどうか、結末では明確に描かれないが、第3部最終章での笠原メイと〈僕〉のやりとりは、笠原メイがクミコの身代わりとなる可能性を暗示し、クミコが〈僕〉の元に帰ることはないと考えられる。それほどに、作家村上にとって遺伝の問題は大きかったと推測される。

注

(1) 第1部の初出は『新潮』一九九二年十月号〜一九九三年八月号。後に単行本として『ねじまき鳥クロニクル第1部 泥棒かささぎ編』と『ねじまき鳥クロニクル第2部 予言する鳥編』（書き下ろし）が一九九四年四月新潮社から刊行。第3部は第10章「動物園襲撃（あるいは要領の悪い虐殺）」のみが『新潮』一九九四年十二月号に掲載。単行本『ねじまき鳥クロニクル第3部 鳥刺し男編』は一九九五年八月新潮社から刊行。新潮文庫は全3部ともに一九九七年十月に出版。後に第1部

と第2部は『村上春樹全作品1990～2000』④ ねじまき鳥クロニクル1』（講談社、二〇〇三年五月）、第3部は『村上春樹全作品1990～2000』⑤ ねじまき鳥クロニクル2』（講談社、二〇〇三年七月）に収録。本論の引用は『村上春樹全作品1990～2000』に拠った。

- (2) ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳「泥棒かささぎ」序曲『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（新潮社、二〇〇六年九月）。ジェイ・ルービンは「二人の結婚は、少なくとも六年間の官能的な親密さと真の愛と思われるものをもたらしてくれた」が、「二人は我を忘れるほど快樂に身を任せたことはない。つねに何かを抑制していた。」と指摘している。
- (3) すでに西村龍一「電話の「声」とアイデンティティー」『ねじまき鳥クロニクル』あるいはメディア時代の文学（『国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書』二〇〇三年八月）は、クミコが「忌まわしい性的変態の兄と同じ血をひいている自分自身におびえ、自分にもいつかそうした性的欲望が発現するのではないかと不安に襲われ」ていたと論じている。しかし、西村論文の趣旨は、『ノルウェイの森』の直子とキズキがクミコとノボルとなり、『ねじまき鳥クロニクル』は

「僕」と直子とクミコが協力して、二人を損なうキズキとノボルを抹消する物語であると読むことであり、クミコの心身分裂とノボルによる近親相姦の脅威に焦点をあてる本稿の立場とは異なる。

- (4) イアン・ブルマ著、石井信平訳『イアン・ブルマの日本探訪―村上春樹からヒロシマまで』（TBSブリタニカ、一九九八年十二月）。

- (5) 山崎眞紀子「村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論―火曜日の女から金曜日の女へ」は、ノボルが選挙に出る話を持ち上がり、クミコが彼の離婚歴について語った後、初出誌で続けられる言葉に着目している。「あの人が好きなのは死んだお姉さんなんだもの。死んだお姉さんがあの人にとって全てなんだもの。あの人はこれまでにたぶん、死んだお姉さん以外の女性を好きになったことなんて一度もないと思うな」

などの箇所が単行本以降削除され、ノボルはクミコの姉に「性的なまなざしを向けていた」と論じている。

- (6) 「彼は（中略）後ろから私の中に何かを入れました。それが何だったのか、私には今でもわかりません。とても硬くて、ものすごく大きなものでしたが、でもそれはとにかく彼のペニスではありませんでした。（中略）やはりこの人は性的に不能なのだ」とそのとき私は思いました。」（第2部第13章、傍点ママ）。

- (7) 『新潮』一九九二年十月一日、前掲単行本。文庫本以降削除される。

- (8) 『新潮』一九九二年十月一日。単行本で「ガルシア・マルケスや、ギンター・グラスを読むことは」が「多少なりとも読みごたえのある小説を手にするには」に書き換えられ、文庫本以降はこの段落が全部削除されている。

- (9) コロンビアの作家ガブリエル・ガルシア・マルケスが一九六七年にスペイン語で発表した長編小説。日本語全訳版は、一九七二年五月に新潮社より刊行。訳者は鼓直。同訳者による改訳版は一九九九年八月に新潮社より刊行。改訳版は後に『ガルシア・マルケス全小説』（二〇〇六年十二月）に収録。

- (10) 初出は『別冊小説現代』一九八五年冬号。後に単行本『パン屋再襲撃』（文藝春秋、一九八六年四月）、『パン屋再襲撃』（文春文庫、一九八九年四月）、『村上春樹全作品1979～1989』⑧ 短篇集Ⅲ（講談社、一九九一年七月）に収録。

- (11) 前掲『村上春樹全作品1979～1989』⑧ 短篇集Ⅲ。

- (12) 村上春樹は他の短編で、「あんたたちフロイトとかユングとか読んでごとないの?」「これというのみんなフロイトのおかげだ」（『シドニーのグリーン・ストリート』。初出は『海』臨時増刊『子どもの宇宙』一九八二年十二月号）、「僕はもちろんジグムント・フロイトではないので」（『パン屋再襲撃』。初出は『マリ・クレール』一九八五年八月号）と、フロイトに言及している。村上作品におけるフロイトの重要性に

関して、柘植光彦「メディアとしての「井戸」——村上春樹はなぜ河合隼雄に会いに行ったか」(『国文学 解釈と教材の研究』一九九八年二月)は、『風の歌を聴け』から使用される「井戸」のテーマを、フロイトの「イド」として読んでいる。小林正明「暗いパロディーフロイト現象としての村上春樹」『岩波講座文学12 モダンとポストモダン』(岩波書店、二〇〇三年六月)は、「村上春樹の主要テクスト群に、主軸としてかつ断片として、遍在している基本原理は、フロイトである。」と指摘し、フロイトの影響を指摘している。

(13) フロイト著、福田覚ら訳『フロイト全集21』(岩波書店、二〇一一年二月)。

(14) 『六本の指と四つの乳房』に関して、林正『村上春樹論——コミュニケーションの物語』(専修大学出版局、二〇〇二年三月)は、「僕」と「クミコ」の夫婦関係の奇妙さを象徴的に言っている」と論じている。王凱洵「『ねじまき鳥クロニクル』における自我形成をめぐって——メディアウムの存在に視点を」(『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』二〇一五年三月)は、異常とみなされる「遺伝子」の話題を語ることで、笠原メイは「僕」に「異常」を受け入れ、他人を理解してもらおうとしたと解釈している。

(15) フロイト著、新宮一成ら訳『フロイト全集15』(岩波書店、二〇一二年五月)。

(16) 『村上春樹全作品1979〜1989』⑥ ノルウェイの森』(講談社、一九九一年三月)。